

論文

近畿地方（中央部～北部）にみる地蔵の彩色習俗

——彩色（化粧）地蔵像分布と伝承の考察——

近 石 哲

CHIKAISHI Satoshi

はじめに

国内各地に流布・分布している民俗信仰の中で、今現在、最も盛行している一つに「地蔵信仰」がある。しかし、地域（地方）においては、戦後の高度成長や都市における近代化・合理化主義を背景に伝統的な民俗信仰文化が希薄化し、さらには少子高齢化及び無宗教層の増大等により、現在は衰退の一途を辿っているといっても過言ではなかろう。

そのような世相の中、京都を中心とした近畿地方では盆月最後の行事として地蔵盆（祭）が、今現在も地域住民により伝承され盛行している。その行事準備の中で特に珍しい特徴があらわれるのは、石仏の地蔵像に彩色をする習俗である。この彩色も国内において特別な分布を示し、地域別に異なった特徴と独自の習俗があるといえる。

地蔵の彩色については謎が多く、その習俗の起源や由来並びに伝承過程について確証を得られる資料には乏しい現実から、地蔵像彩色に特化した研究論考は極端に少ないといえる。考えるに、資料的に乏しいこの習俗の全体像を明らかにするのが難解であるため、研究が進まないのであろう。さらにいうと、各地域において地蔵彩色習俗の伝承は先人から口伝で継承される習俗であり、地域住民は地蔵彩色が文化であるという認識が低く文字による伝承に関心が薄かったといえるのではなかろうか。

地方においては衰退が加速される民俗信仰の現状から、本稿では難解な習俗である地蔵の彩色について、近畿地方（中央部～北部）各地の実態調査から得た資料を基にして考察を加えてみたい。

I 彩色習俗（地蔵）の研究史と彩色の基礎的（一般的）な理解

（1）先行研究の視点と動向

彩色（化粧）地蔵に関する先行研究を整理すると、下記のように類別することができる。

① 由来に関するもの

『本朝世紀』には、天慶元（九三八）年九月二日に

東西両京の大小の路衢^{ろちまたかみ}神に木を刻みて神を作り……（中略）……、丹をもつて身を塗り、緋衫の色をなす。……（中略）……ある所はまた女型を作って丈夫（男根）に対してこれを立つ。臍下腰底に陰陽を刻み絵く。……（中略）……号して岐^{ちまたかみ}神と曰ひ、また御霊と称す。とあり、子

供たちが都の辻々で岐神すなわち道祖神をまつている（黒板 1999）。

次に、柳田國男は『日本の伝説』で、雨乞いときだけ田の泥を塗る地蔵をはじめ、地蔵にものを塗り付ける各地の習俗を紹介し、いずれも「仏教が伝えた教えではない」と指摘している。さらに、……（前略）……京都ではもう古いころから、毎年七月二十四日には六地蔵詣りといって、……（中略）……子供は道のはたの石仏をひとつ所にあつめて来ました。そうしてその顔を白くぬってすべてこれを地蔵となづけ、花をたてて食べ物をそなえて、町から来た人に拝ませました（『山城四季物語』『日本の伝説』柳田 1969：149）。

また、冬の地蔵祭りについて、

旧十一月十六日早朝に子供たちが米の粉を地蔵の顔に塗り、夕方には藁火を焚いて真黒にいぶした、大阪四天王子の道祿神（道祖神）の祭り、小正月に道祖神を白く塗ったり、どんど焼きの火の中へ入れて黒くいぶしたり、朝ついた餅を塗り付けるなど、地蔵祭りと酷似する道祖神祭りを例示している（柳田 1969：149）。

② 色調・色彩に関するもの

京都市を中心にした井上頼寿『京都民俗志』の「習俗」の項で「地蔵を彩色する」に

京都の街で、町内に祀る地蔵尊を地蔵盆に白く全体を塗り、その上へ顔や衣紋、持ち物などを描く風習がある（井上 1933：263）。

次に、牧田茂「京の夏と地蔵盆」『化粧地蔵 こどもの神さま』から

京の町にはいたるところに地蔵さんの祠がある。それもふだんはそれと気がつかないような路地の奥だったり、家と家にはさまれた……（中略）……たいていは石の地蔵さんだが、よだれかけのほかに、綿の頭巾をかむっていらっしゃることもある。三重のことが多く、全部白の綿だったり、赤と白だったり、赤、白、黄の三色だったりする。

その地蔵さんを、毎年8月23、4日の地蔵盆には、祠から取り出して、その年の当番の家の表の間とか、近くの空地にテントを張って設けた祭壇に移して、お祀りするのである。その時、石の地蔵さんだと、洗ってさし上げたり、顔や衣紋を絵具できれいに塗り変えたりすることがある（牧田 1973：155-156）。

山路興造『京都芸能と民俗の文化史』では

『本朝世紀』……（中略）……によれば、平安時代の初頭、都では子供たちが辻々において塞の神を祀るという習俗があった。……（中略）……丹を以て身を塗り、緋衫の色を成す（山路 2009：287）。

大森恵子「但馬の行事と民俗信仰——子供をめぐる民俗——」『フィールドから学ぶ民俗学』では……前略……竹野町宇日の地蔵盆（八月二三日）では、子供たちが海から拾ってきた楕円形の石にクレヨンで地蔵尊の絵を描き、地蔵堂の周辺に墓座を敷き、この石を「地蔵さん」とよんで自分の前方部に安置する（大森 2000：272）。

③ 信仰・儀礼との相関について

林英一『地蔵盆受容と展開の様式』に

地蔵への化粧という行為は、多くの地区で地蔵を洗ってきれいにすることの延長上にあるものと考えられ、とくに儀礼化されているものではないようである。……（中略）……つまり地蔵に化粧を施すに際して、行事の中での特定の役にある人が、特定の作法にしたがって行うということはないということである（林 1997：59）。

林はさらに松浦忠平『地蔵盆——京の夏 おもいでばなし——』を引いて

「化粧」は地蔵をきれいに飾るために行われるものとして捉えることができるものであり、このことから飾り付けの一環の行事要素と捉えられるものとなっている（林 1997：59-60）。

④ 盛行地域について

石川純一郎『地蔵の世界』では

地蔵に彩色したり化粧を施したりする習俗は全国的な伝承をみているが、とりわけ津軽平野と京都市・丹後の宮津・若狭の小浜などが顕著である。……（中略）……神像や仏像に丹朱を塗ることに始まった習俗であろう。『本朝世紀』天慶元（938）年9月の条には、……（中略）……この神像に丹朱を塗って真っ赤に彩色をしたことを記している（石川 1995：91）。

⑤ 彩色の意味について（最新の論考）

渡邊三四一「石神仏に色を塗ること——その民俗的解釈に向けて——」『日本の石仏 No.143』新潟県十日町の事例では

……（前略）……小正月の道祖神火祭りのあと、墨塗りといってサイノカミを焼いた灰を雪泥でこね、薬師堂の薬師像や旧家の主人に塗りつけた後、一年の無病息災と厄落しの意味で村人同士が互いに墨を塗り合う。サイノカミの火で焼かれた灰に呪力を認めてのことであろう。……（中略）……若い衆らが鮮やかな隈取り（白・赤・青・黒）を施し竹を引き合う。これは神に仕える者としての強さを表すものという。隈取りも化粧の一種で、変身や再生の重要な要素といえる（渡邊 2012：5）。

九州阿蘇地方、秋田県鹿角郡、茨城県行方郡、福岡県朝倉市にみる塗る習俗から

……（前略）……「塗る」民俗には、生命力や霊力の増強復活を図り、魔除けや豊穡を期待する意味が読み取れるのである（渡邊 2012：7）。

（2） 先行研究のまとめと問題提起

数少ない先行研究を整理すると、彩色は『本朝世紀』天慶元（九三八）年に京都において、路衢^{ろちまた}神、岐神^{かみ}に「丹をもつて身を塗り、緋衫の色をなす」のが起源とされる。地蔵との相関では、境界神・塞の神や道祖神は、その祀られた祭祀場所から信仰の混淆や習合が生じたとされている。

次に、色調・色彩については具体的であるが、地蔵に施す（塗布）部位についての具体的な記述はない。（例：顔のみ、全体に及ぶ）

また、信仰・儀礼では「地蔵をきれいにする延長上」であり「化粧を施すという行為は儀礼化されてない」と言及している。さらに「飾り付けの一環」とし、彩色について注目すべき特徴とは捉えていない。

地域について、「とりわけ津軽平野と京都市・丹後の宮津・若狭の小浜などが顕著である」と述べるが、周辺部について広がり言及はない。

彩色の意味では「塗る民俗には、生命力や霊力の増強復活を図り、魔除けや豊穰を期待する意味が読み取れるのである」と結論づけているが、地蔵の彩色だけではなく「塗る民俗」の一般的な解釈であろう。

先行研究の整理であるが、各論考では地蔵像彩色について、各地での色調・色彩や施す部位の特徴や、彩色の分布・伝承経緯について明らかにした論考が極めて少ない。

地蔵彩色の由来は京都を中心とされるが、彩色の地域分布や、彩色の伝承経路を捉え発表された研究は管見の限りにおいて見当たらない。

その理由の一つには、この彩色が口伝えにより継承されている習俗だからであろう。何故ならば、口伝えの伝承は時を経ると、その起源や由来は曖昧になり習俗のみが残り、変容が重ねられる傾向がある。また、地域住民が文書等に記録するという必要性・重要性、さらには地域が育んだ文化という関心が低いためである。それは生活の中で必然的な行事習俗として伝えられたからではなかろうか。

(3) 研究の課題と目的

前述の先行研究の多くは地蔵の彩色を注目すべき特徴とは捉えず、しかも一地域での考察が多い。本稿では調査地を広域にして、得られた資料から現在の彩色習俗分布実態を明確にし、分布から考えられる彩色の特徴や伝承を明らかにすることを目的とする。さらに、この習俗は地蔵信仰の祭祀（地蔵盆）の中で行われる興味深い特徴であり、地域特有の文化として広く発信できればと考える。

(4) 調査地の選定と研究の方法

調査地は、近畿地方（中央部～北部）において「地蔵祭り、地蔵盆」が現在も伝承され盛行している地域とし、事前調査で県・市・町・村史の資料内容を確認、教育委員会、博物館・郷土館へ問い合わせすることで調査対象地域を選定した。地理学的に異論もあろうが、筆者の任意で調査地の呼称を近畿地方（中央部～北部）とした。

尚、本稿では、各地で1～2体の彩色（化粧）地蔵しか確認できない事例に関しては稀有な資料として研究対象外とした。また、以下の調査項目を中心にして、各地の彩色地蔵の実態確認と聞き取り調査を実施する。

*彩色習俗の調査項目

- ① 彩色（化粧）の発生起源（いつごろからはじまったのか）
- ② 彩色（化粧）の由来（どこから伝承されたか）
- ③ 彩色（化粧）の意味合い（何故するのか）
- ④ 彩色をする主体（誰が色を施すのか）
- ⑤ 彩色の時期（定期的に、または不定期）
- ⑥ 彩色の材料（例：ペンキ、エナメル、油性マーカー）
- ⑦ 彩色の色調（何色で彩色するのか）
- ⑧ 彩色の費用（例：町・村会費、寄付）

- ⑨ 彩色と信仰の関係
- ⑩ 彩色の部位と地蔵の像容
- ⑪ その他特記事項

Ⅱ 他分野における彩色の意味合いと地蔵彩色の関連

各地の彩色の実態調査について述べる前に、ここでは、他分野の研究から地蔵に彩色を施す意味について手がかり・足がかりを見出すべく、具体的には、彩色の意味、色調・色彩、について仏像、仮面や化粧の側面から探ってみたい。

(1) 仏像や仮面の彩色

地蔵民俗信仰の信仰対象は石造の地蔵であり、広くは仏像である。教団寺院で信仰対象の仏像彩色から手がかりを考えてみる。

「彫像の彩色法について」(『仏教芸術 86 号』)では、彩色したものの作例から、「仏像彫刻の材質は、……(中略)……木彫、乾漆像、塑像には、像全体に彩色が施される場合がはなはだ多く、その技法もさまざまである」(西川 1972: 24)。

「仏教彫刻の彩色の下地について」(『美術院紀要』)もまた、彩色の材料特性や技法に特化した論考である(杉山 1969)。本研究が期待した、彩色の意味合いや起源についての論考はなく、それを必要とする研究も見当たらない。

次に、彩色は「擬人化」のあらわれではないかという側面から「仏教と仮面」(『仮面の民俗』)をみてみると、

……(前略)……仏教美術が世相と共に表した様式と同じように初め信仰の対象であった民俗の仮面も時代を経るに従って、次第に美意識を加えながら芸能と共に完成していくのである。……(中略)……布作面には……(中略)……また男女の別なく頬と口唇に丹を塗って化粧をしている(山内 1967: 170-173)。

……(前略)……舞楽が輸入される頃になると、仏教美術も洗練され、……(中略)……彩色に金箔を漆でほどこすはなやかなものになった。……(中略)……平安時代の密教は当時の仏像に最もよく表されているように、逞しい写実的な仏像に官能的な美しさを漂わせる神秘的な要素をつけ加えている。この結果はその人々に仏教に対する親しみを、より一層もたせるに至ったのである(山内 1967: 173-174)。

擬人化の側面から彩色の習俗をみるということで、『民俗の仮面』も最初は信仰の対象であったが、その仮面も時代とともに変容を重ねて、「人々に親しみ」をもたせるように変化したと述べている。

本稿の意図する彩色の意味の一つとしても、同じことがいえるのではなからうか。地蔵に彩色(化粧)を施すことによって地域の人々に、より親しみ深い信仰対象としての地蔵に変容するのである。それゆえに、各地にみる「化粧地蔵」という御名はその意味合いを表しているといえるのではないかと考える。

(2) 化粧とは

化粧の面では、「化粧という文化」(『サティア第44号』)の記述からみても。この論文は、人(特に女性)の化粧を文化として取り上げ、「化粧とはなにか」という観点からの論考といえる。

化粧の整理は人類学の定義によると

……(前略)……もともと人類学で定義されていたのを使用して「身体変工」「色調生成」「ペインティング」の三つに分類する。広義の化粧である。……(中略)……ペインティングは皮膚に色や艶を添える行為で洗い落として元の状態に戻すことが出来る。いわゆるお化粧。……(中略)……狭義で化粧とされることがある(村澤 2001:21)。

この定義から、本稿の化粧地蔵をあてはめると、各地の地蔵彩色は「ペインティング」ということが出来る。

続いて「邪霊を防ぐ入れ墨とお歯黒」(『化粧の民俗』)では

三世紀ごろの中国の史書、『魏志倭人伝』に、入れ墨とお歯黒の話が出てくる。これが日本人の化粧についてのいちばん古い記録であろうか。人間が災いを起こすのは邪霊が体に入ってくるからだと考えられていたので、それを防ぐ魔よけのような意味があったのだろう(石上 1999:7)。

以上の事から、「それを防ぐ魔よけのような意味」とは、地蔵の職能(霊験)である村の境を守る「現世利益」の職能(霊験)と合致しているともいえる。

Ⅲ 近畿(中央部～北部)地方にみる彩色(化粧)地蔵の実態

この章が本稿の中心部であり、具体的に各地における彩色習俗について、現地調査の資料を基にして、現在地蔵信仰(地蔵盆・祭)が盛んな地域における彩色習俗実態を述べる。

尚、基本的には調査時期の古い順序に述べる。また筆者の任意で、現在の行政区分を無視して旧国名や旧町名、また地理上まとめる地域もある【例：旧国名で丹波、丹後、但馬とし、地理上まとめて小浜、舞鶴、宮津を若狭地方とした】。以下の写真資料は筆者撮影による。

(1) 京都市内(北区、上京区、下京区、右京区、伏見区)並びに宇治市

地蔵信仰の祭祀(地蔵盆・祭)行事を準備する過程で、京都市内では現在も次のような実態が伝承されている。

町内の辻角に安置されて、「お地蔵さん」・「地蔵さん」・「大日さん」の愛称で呼ばれている地蔵の祭祀準備状況についてふれてみる。地蔵盆の前々日・前日になると、町内会の長老達で地蔵を祠(御堂)から出し御身を洗う。古くは真綿で洗っていたらしいが、現在では、たわしやブラシで洗っている。古くは、洗い清めた後に地蔵に派手な化粧を施していたが、現在では顔に白塗りをして口に朱紅を施すだけのものになっている。きれいになった地蔵の首に、赤白の胸あて(涎掛けともいう)が結びつけられる。町内に祀られる「お地蔵さん」の像は、一般に、30 cm から 50 cm ほどで上部がやや細くなった卵型の石である。また像容はほとんど認められず、それは経年による摩滅ではないものが多い。



写真1 京都市内（北区、上京区、右京区）の彩色（化粧）地藏

彩色は地藏盆の前にするが、最近では彩色する地域は少なくなったという。色調・色彩の古くは、胡粉などで白く塗り、眉や口紅をつけ石全体に塗るとされる。現在は、顔だけに白塗り、口に朱紅を施す、まさに化粧であって石全体にわたることはないのが大多数である。材料は、胡粉・白粉は消えやすいのでペンキや油性マーカーが主流である。彩色をするのは古くは子ども達であつたらしいが、現在は町内会の役員によって彩色を施す。彩色の後、この石に赤い涎掛けをかけて、「お地藏さん」として祀るのである。

調査地において、彩色の起源や由来、彩色の意味について質問したが、どの町内会でも「昔からやっている」とか「古くからのならわしです」というのが等しい回答である（話者：北区紫野町内会役員）。

彩色の形態は、北区、上京区、下京区ではほぼ同様であるが、伏見区や宇治市においては色彩や色調に一貫性はなくいわば自由な彩色（化粧）で、一部地域（伏見区）では頭部に座布団らしきものを乗せる稀有な事例が確認出来た。



写真2 伏見区、宇治市の彩色（化粧）地藏

調査結果からの考察であるが、京都市での彩色は洛中（北区、上京区、下京区）と洛外（伏見区、宇治市）では少し異なる。洛中では一貫性・類似性を認めるが、洛外では地域別に自由な彩色（化粧）であるといえる。

洛中は平安京に都が移されてからの歴史があり、特に古くからの住民には今も伝統文化を守り継ぐ気風がある。地藏像の彩色においても、民俗信仰とはいえ伝わった文化としてその特徴を踏襲した色調・色彩を継承していると考ええる。

他方、伏見区や宇治市は洛外と位置づけられていた。そのような意味と色調・色彩や部位からみて、都（洛中）よりも洛外としての独自の特徴を出そうとしたというのが、自然に考えられることではなかろうか。

表1 京都各地域の化粧地藏調査表

	北区	上京区	下京区	伏見区	宇治市
彩色の起源・発生	不明	不明	不明	不明	不明
彩色の由来	信仰の習合 (本朝世紀／路衢神)	信仰の習合 (本朝世紀／路衢神)	信仰の習合 (本朝世紀／路衢神)	不明	不明
彩色の意味	綺麗にする	綺麗にする	不明	綺麗にする	綺麗にする
彩色する主体	町内会役員	役員と子ども	子ども	子ども	町内会役員
彩色の時期	地藏盆の前	地藏盆の前	地藏盆の前	地藏盆の前	地藏盆の前
彩色の材料	マーカー、絵具	ペンキ、絵具	マーカー、絵具	ペンキ	絵具
彩色の色彩	白、黒、赤	白、黒、赤	白、黒、赤	白、黒、赤	白、黒、赤
彩色の費用	町内会費	町内会費	町内会費	町内会費	町内会費
信仰との関連	子どもの健全な育成	子どもの健全な育成	町内安全	子どもの健全な育成	町内安全
彩色の部位と 地藏の像容	彩色は顔・口のみ 像容は不明確	彩色は顔・口のみ 像容は不明確	彩色は顔・口のみ 像容は不明確	彩色・像容とも 一貫性なし	石全体に施す 像容ははっきり
その他 特記事項		町方文書に記述あり	町方文書に記述あり	頭上に座布団らしきものを乗せる地藏あり	地藏1体に年号 銘文あり(元和)

*起源については、文献史料(町方文書)には「貞享二～嘉永・明治(1600年代末～1800年代)と石仏(宇治市)の年号銘文(元和九1623年)」とあるのは地藏盆や像造立と考えられる(京都市(編)1980『史料京都の歴史』)【文書には彩色に関する文言は認められない】

例として、前述の「伏見区の阿波橋・杉本町では地藏の頭部にカラフルな座布団らしいものを乗せる」⁽¹⁾などは、他地区にはない特徴といえる。

(2) 若狭(小浜、舞鶴、宮津)地方

筆者が福井県小浜市を近畿地方とし、さらに京都府舞鶴市、宮津市を「若狭」としたのは、地理的に若狭湾に面していて、古くは小浜・舞鶴・宮津は京極氏の支配する藩であったからである。互いに隣接地であり海運等の関係から文化の交流もあったとされ、都からの往来も同様に頻繁な歴史を持つ地域である。

小浜市西津地区の地藏盆準備を時系列的にみると、まずは「盂蘭盆会」⁽²⁾前の8月10日頃に、地藏像を洗う井戸の底石を探しに行く(場所是对岸の仏谷海岸や小浜公園海岸)。集めた石を井戸の底に敷くのは、古い石は穢れているので新しい底石を敷き清らかにするという意味合いがある(この事は、地藏の彩色も同様で穢れているとされる)。

次に、盂蘭盆会が終わってから、地域の各辻角の祠に安置されている石仏の地藏を取り出して海に持って行き、その古い(今年の)彩色を洗い落とす。昔は、その後町内に持ち帰り井戸水で再度洗い清めたが、これはすべて子どもの仕事であつたらしい。現在では少子化で、地藏の運搬等々は町内会の役員が行っており、一部の習俗は行われていない。(例:井戸の底石。話者:本村昭悟氏)。

石仏の地藏を乾かしてから、子どもたちが彩色をする。古くはペンガラや岩絵具(群青・緑青・黄土等々)を使ったが、現在では絵具・油性ペンなどで自由な色を使って地藏に彩色し、この地域では地藏を「化粧地藏」と呼称する。最近、祠に地藏を2体安置している町内会もあり、「男地藏と女地藏」としている。男地藏のほうが大きくて、その彩色も派手に塗られ、女地藏は小さい石像で彩色も穏やかな感じを受ける。また、前述の京都とは違って、石全体に彩色を施している。背に「後光」⁽³⁾

を描いているものも数多くある。地蔵の像容は、俗にいう「ただの石ころ（石工の制作もある）」であるが、彩色が施された姿は立派な「お地蔵さま」である。



写真3 小浜市西津の彩色（化粧）地蔵

地蔵に彩色をする慣習は、「この西津の長老であった船井三蔵さんの時代からあったと聞いている」とのことであり、さらには「船井三蔵さんが存命ならば120歳以上であるから、1890年（明治23年）かぁ……古いなぁ」と教えてくださった。しかし「当時の彩色そのものが伝承して今に続いているかどうかは定かではない」という事である。ともあれ、小浜市西津地区での彩色の発生とも考えられる貴重な聞き取り資料であるといえる（話者：木村昭悟氏）。



写真4 小浜市西津地区と宮津市の地蔵マップ

小浜市の彩色は地蔵像全体に彩色を施し、尚且つ色調も特定されず自由な色を使った独特な彩色方法であるといえる。彩色する色も、赤・青・黄・白・黒の基本的な色の他に、金・銀・茶・紫というような色もあり極彩色で派手な彩色といえる。彩色に使用するのは、現在では京都と同じような絵具やペイントマーカーが主流のようである。このような派手な彩色は、舞鶴市や宮津市でも同様にみられる。

彩色は、地蔵像を洗い清めた後で施すのは、京都を中心にした近接地で共通するが、子どもが主体



写真5 舞鶴市、宮津市の彩色（化粧）地蔵と鐘（銘文）

で彩色する習俗が継承されているのは、小浜市西津や宮津市だけであろう。

特徴的なこととして、小浜市西津と宮津市では、「化粧地藏マップ」を作成して、地域住民による「地域おこし」運動を行っている。また、西津地区では最近地藏盆（8月23日）に「地区別のコンテスト」も行い、文化伝承の高揚を図っている。が、この地域では特に少子高齢化から、地藏盆行事の衰退に不安を抱いているのが実態である。

表2 若狭各地方の化粧地藏調査表

	小浜市	舞鶴市	宮津市
彩色の起源・発生	不明	不明	不明
彩色の由来	不明	不明	不明
彩色の意味	綺麗にする（地藏盆の前には海で色を洗い流す）	綺麗にする	綺麗にする
彩色する主体	子ども	地区役員と子ども	子ども
彩色の時期	盂蘭盆の後～地藏盆の前	地藏盆の前（毎年ではない）	地藏盆の前
彩色の材料	絵具、油性マーカー、ペンキ	絵具、油性マーカー、ペンキ	絵具、油性マーカー、ペンキ
彩色の色彩	赤、青、黄、白、黒、金、銀、茶、紫（極彩色）	同左	同左
彩色の費用	町内会費（地藏盆費用）	町内会費	隣組の寄付
信仰との関連	健全な育成、地区内の安全	健全な育成、地区内の安全	健全な育成、地区内の安全
彩色の部位と地藏の像容	石全体に塗る。像容は不明確でただの石が大多数である	石全体に塗る。像容は不明確でただの石が大多数である	石全体に塗る。像容は明確な石工の作もある
その他特記事項	地藏マップ（写真付）あり	佛具（鉦）に銘文の刻印あり	地藏マップ（写真付）あり 佛具（箱）に墨書あり

（3）京都府下（丹波、丹後、但馬）

「京都六地藏」の一体である「桂地藏」が安置される山陰道（丹波街道）沿いの地域であり、都との経済や文化が交流した主要流通経路といわれている地域である。⁽⁴⁾

① 丹波（亀岡市、船井郡京丹波町、福知山市大江町）地方

丹波（山陰）道を下り、亀岡市から船井郡（京丹波町、園部町）、福知山市にかけて、いわゆる京都圏の丹波地方ということが出来る。

亀岡市では、平成10（1998）年に『新修亀岡市史』資料編第5巻末部の「石造文化財一覧悉皆調査表」の中に12箇所の化粧地藏が記載されている。

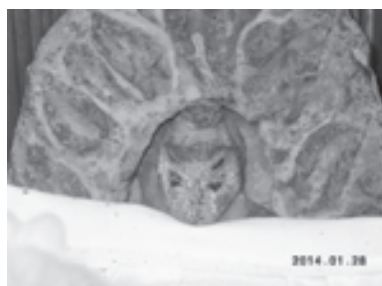


写真6 亀岡市の彩色（化粧）地藏

亀岡市の現状調査から、その特徴について述べてみる。調査表（表3）と写真資料でわかるように、市内では数箇所での彩色（化粧）地蔵の存在が確認出来た。しかし、他の地方と比較すると彩色されているとは言い難く、その色あせた像容から近年は彩色が施されていないことがうかがえる。

例えば、亀岡市旅籠町には2箇所の地蔵堂に5体と1体の地蔵が安置されている。場所は大通りはずれの路地奥であり管理も行き届かない状態にあった。近い将来において祠や地蔵も消滅の一途を辿るのではないかと危惧されている。

京丹波町、福知山市大江町の調査においては数多くの化粧地蔵が確認出来た。この地区は、毎年の如く地蔵を洗い清めて色あざやかに彩色をしている。地蔵堂の管理も行き届き、古くは地域住民の信仰の場であったが、現在では、「地蔵さんをお守りする地域の住民親睦の場ですよ」とのことである（話者：K氏）。



写真7 京丹波町、福知山大江町の彩色（化粧）地蔵

以上、彩色の一番際立つ色彩や部位については、各地域それぞれであり類似することはない。総じて丹波地方での彩色については、色彩や部位は地域により独特で異なるといえる。

表3 丹波各地方の化粧地蔵調査表

	亀岡市	京丹波町	大江町
彩色の起源	不明	不明（新しく数年前からのものもある）	不明
彩色の由来	不明	不明	不明：聞き取りでは、京都西陣からちりめんロードを通り伝承？
彩色の意味	不明	不明	地域の入口にふさわしく化粧する
彩色する主体	役員	役員と子ども	役員と子ども会や婦人会
彩色の時期	地蔵盆の前（毎年はしない）	盂蘭盆の後～地蔵盆の前	盂蘭盆の後～地蔵盆の前
彩色の材料	胡粉（白）、絵具（黒）	絵具	絵具、顔料
彩色の色彩	白、黒	白、黒、赤、肌色、	白、黒、赤、肌色、水色、黄、弁柄
彩色の費用	不明	町内会費、個人の寄附による	婦人会
信仰との関連	不明	町内安全、健康促進	町内安全、健康促進
彩色の部位と地蔵の像容	顔（眉・目は黒、口は赤）色あせ、毎年は塗らない	顔（眉・目は黒、口は赤）のみに塗る。像容は不明確	像全体に塗る。像用は明確で石ではなくその頭部から地蔵と判る
その他特記事項		最近（10数年前）始めた地域もある	婦人の観音講が御詠歌を唱える

② 丹後与謝郡（加悦町、野田川町、伊根町）地方

丹後地方は、郡部（加悦町、野田川町、伊根町）、京丹後市（久美浜町、網野町、弥栄町、峰山

町、大宮町）と調査地が広域のため、わかりやすく写真資料・調査表や考察をわけて表示した。

加悦町（現在は与謝野町）明石・温江地区の集落は、隣組の組織が地藏盆と地藏の彩色（化粧）の伝承を守っている。住民（森本氏）の案内で多数の化粧地藏が確認出来た。彩色（化粧）についての聞き取りでは、他の地方と同様で「地藏盆の前に地藏洗いと化粧をする。以前は子どもが中心だったが現在は隣組役員で行う。近年は隣組（13組）の交流の場である」、「化粧は顔料や絵具を使い、きまりはなく個人の趣味で塗る」という事である（話者：森本氏）。この地区では、地藏には2種類あって、1体は地藏盆用でもう1体は「願いかけ」のものである。願いかけ地藏の祠には「延命、子育て、地区内の健康と安全」という願文がみられる。

聞き取りでは、「加悦・峰山は丹後ちりめんの発祥地で、古くから西陣（京都）との行き来が濃いので地藏盆や化粧地藏が伝わったと爺様から聞いていた」と彩色の伝承過程を語ってくれた（話者：森本氏）。



写真8 与謝郡与謝野町加悦地区の彩色（化粧）地藏

尚、森本氏の御自宅前でお話を伺っている際に、隣の建屋から「カシャ、カシャ」と機械の音が絶え間なく聞こえてきた。建屋の中からのその音色は「自動織機」であった。地藏調査とは関係ないが、最近を着物文化が衰退し、反物の需要がなく廃業の一途であるらしい。寺社の「お守り袋」生地の仕事があるだけで、「家内と二人だよ」、「人を雇う仕事量はないからね」と寂しく話された。

次に、丹後半島のはずれに位置する伊根では、管理の行き届いた祠に安置された地藏にはきれいな花が飾られており、像には「大正六年」の銘文が刻まれていた。近隣の住民からの聞き取り調査は以下の如くである。



写真9 与謝郡伊根町の彩色（化粧）地藏と台座銘文

「以前は、地藏盆も各地区で盛んであったが現在は行われな。地藏さんも各地区たくさん安置されていたが、現在はこの立石地区のみだ。地藏さんも地区のものと個人所有のものがあ、個人所有は家の中とか中庭に置き換えたので、現状はわからない」と寂しく語られた。さらに「色塗りも毎年

表4 丹後与謝郡各地方の化粧地蔵調査表

	加悦町（与謝野町）	野田川町（与謝野町）	伊根町
彩色の起源	不明	不明	不明
彩色の由来	西陣との交流（縮緬）	西陣との交流（縮緬）	不明
彩色の意味	辻・境界の安全	不明	不明
彩色する主体	子どもと隣組役員	不明	不明
彩色の時期	地蔵盆の前	地蔵盆の前	不定期
彩色の材料	石灰、絵具	絵具	絵具
彩色の色彩	白、黒、赤、黄、緑、水色、	白、黒、赤、黄、緑、水色	白、黒、赤、黄、緑、水色
彩色の費用	隣組の費用	不明	不明
信仰との関連	町内安全	不明	不明
彩色の部位と地蔵の像容	像全体に塗る。像容に一貫性はみられない	像全体に塗る。像容に一貫性はみられない	像全体に塗る。像容は明確に地蔵と判別できる
その他特記事項	街道の分岐や辻に多い		銘文あり（大正六丁巳）

ではなくて、色あせたら塗る」とのことで、彩色は不定期であると話された（話者：長浜氏）。

調査地域（加悦、野田川）は、旧丹後街道（伊根は除く）の要所という立地であり、近世末期から京都西陣との「ちりめん」織物産業の流通主要街道として文化の交流も盛んであった。⁽⁵⁾

③ 丹後京丹後市（久美浜町、網野町、弥栄町、峰山町、大宮町）地方

彩色調査は、北の久美浜町から始めたが、久美浜町には化粧地蔵が存在しない。そこで中町、新橋地区を中心に巡見と聞き取り調査をしたが、そこでも化粧地蔵は確認出来ず、地域住民のお話でも「地蔵盆は今でも8月に盛んにやるが、地蔵に化粧はしないよ」、「隣の網野町には化粧地蔵があるらしいが、久美浜はしない」と話された（話者：久美浜の婦人数名）。



写真10 京丹後市網野町、弥栄町の彩色（化粧）地蔵

網野町では、あみの図書館司書の岩淵氏から、福田川橋のたもとにある五反田地蔵堂に案内していただいた。地蔵堂には数十体の化粧地蔵が安置されていて、綺麗に彩色（化粧）がされていた。日常の行き届いた管理が伝わる地蔵堂である。さらに正徳寺境内に安置してある地域の化粧地蔵6体と住職を紹介していただいた。住職のお話では、「お寺の境内に安置はされているが、日ごろの管理と化粧は地域の人によるもの」といわれた。はっきりとはないが、多分寺が介入して年を重ねると住民の古くからの伝承が希薄になるからという意味も含んだ語り口であった（話者：正徳寺住職）。

次に弥栄町では、町境の入口から街道沿いに多くの化粧地蔵を確認することが出来た。他の地域に



写真 11 京丹後市峰山町、大宮町の彩色（化粧）地藏

はない特徴は、地藏の彩色に弁柄を多く用いていることである。1体だけであるが台座には「延享二」や願文の銘文があった。真偽は不明であるが事実なら「1745年造立」ということになる（但し、彩色との相関は不明）。

京丹後市に合併後の行政の中心地である峰山町では、地藏の彩色に関しては特徴的な事柄は見当たらない。この峰山も、前述の加悦と同様に「丹後ちりめん」の発祥地である。

大宮町の調査では、町はずれの下常吉地区に多くの化粧地藏が安置されていた。色彩には特に際立った特徴は見受けられないが、ここでも地藏の台座に「万延元」や「町内安全」という銘文が刻まれていた。これも疑わしさを残す銘文であるが、当時刻まれたものとすれば「1860年造立」ということになる（但し、彩色との相関は不明）。

以上、丹後（京丹後市）での地藏の彩色（化粧）習俗は、一番北西部の久美浜を除いては、全域に分布して現在においても盛行しているといえる。台座の年号銘文も真偽の疑いはあるが、その時代から地藏があったと考えられる。

表 5 丹後京丹後各地方の化粧地藏調査表

	久美浜町	網野町	弥栄町	峰山町	大宮町
彩色の起源	彩色習俗は無し	不明	不明	不明	不明
彩色の由来		不明	不明	不明	不明
彩色の意味		不明	為諸人（銘文）	不明	不明
彩色する主体		子ども	町内会	町内会	子ども組
彩色の時期		地藏盆の前	地藏盆の前	地藏盆の前	地藏盆の前
彩色の材料		絵具、マーカー	絵具、マーカー	チョーク	絵具
彩色の色彩		白、黒、赤、黄、緑水色、弁柄	白、黒、赤、黄、緑水色、弁柄	白、黒、赤、黄、緑水色	白、黒、水色、弁柄
彩色の費用		個人	町内会	町内会	町内会
信仰との関連			町内安全	延命	町内安全
彩色の部位と地藏の像容		像全体に塗る。像容一貫性なし	像全体に塗る。像容一貫性なし	像全体に塗る。像容一貫性なし	像全体に塗る。像容は明確
その他特記事項			銘文あり（延享二、願文）		銘文あり（万延元、町内安全）

④ 但馬（出石町、豊岡市、城崎町、香住（現：香美町））地方

但馬地方は、現在兵庫県北部に位置し、隣接地には丹波、丹後地方がある。山陰道（現：国道 9



写真 12 兵庫県（但馬）豊岡市、出石町の彩色（化粧）地蔵

号線）を経路として、丹波街道から都に入るルートが主である。明治期には、豊岡県として丹後の峰山町も含まれていた。調査は、福知山の大江町から但馬に入り、最初に出石町、豊岡市内、香住町、城崎町という経路である。

出石町では多数の化粧地蔵が確認出来た。特に、出石高校近くの地蔵堂には、主尊を中心に脇侍 8 体の地蔵が安置され、像全体に弁柄色と黄色の線描きの色彩を施し、主尊の体軀には黄色で「截金」⁽⁶⁾ 細工のような線が施してある。その御身には「元禄五申年」と記されているが真偽のほどは確認出来ない。豊岡市街地では確認出来ず、町はずれで数体確認したが特記する事柄はない。尚、参考資料には、『豊岡市の石造遺物 総集編』（豊岡市教育委員会 1981）がある。

日本海に近い但馬と因幡の境である香住（現：香美町）や城崎町では彩色（化粧）地蔵は確認出来なかった。彩色習俗の有無について亀居山 大乘寺や地域の人々に聞き取り調査を行って、「地蔵盆は、各地区で今でも盛んにやっているが地蔵さんに色は塗らない」との結果を得た。

城崎町でも歴史のある末代山 温泉寺や地域の人々の回答は、香住町と同じく「地蔵さんに色は塗りませんよ」との事であった。城崎・香住（現：香美町）は、旧但馬と因幡の国境であり、旧因幡では詳細な彩色（化粧）地蔵の調査を行っておらず、県史・市史等からも確認は出来ない。

表 6 但馬各地方の化粧地蔵調査表

	出石町	豊岡市	城崎町	香住町
彩色の起源	不明	不明	彩色習俗は無し	同左
彩色の由来	不明	同左		
彩色の意味	不明	同左		
彩色する主体	婦人会	不明		
彩色の時期	地蔵盆の前	地蔵盆の前		
彩色の材料	絵具、弁柄	絵具、弁柄		
彩色の色彩	白、黒、赤、黄、緑水色、弁柄	白、黒、赤、黄、緑水色、弁柄		
彩色の費用	町内会費	町内会費		
信仰との関連	延命、町内安全	延命、町内安全		
彩色の部位と地蔵の像容	像全体に塗り衣紋に截金を描くものもある。	像全体に塗る。 像容に一貫性はなし		
その他特記事項	地蔵に銘文あり（元禄五申年）			

(4) 滋賀・琵琶湖岸（西・南・東・北と朽木）地方

滋賀（近江）は、琵琶湖岸を中心に都の文化や経済交流が盛んであった。彩色（化粧）習俗について、琵琶湖一周（全域ではないが）の要所となる地域での調査結果を以下に簡略に述べる。

湖西、近江今津町（現：滋賀県高島市今津）では、「琵琶湖汽船」の乗場付近の2箇所の地蔵堂に化粧地蔵が安置されていた。京都市内の彩色方法とまったく同様の地蔵と、線描きでアニメ調の地蔵が3体安置されていた。この今津町では、他に化粧地蔵の例はみかけないとの事である（今津コミュニティセンター情報）。一方の地蔵堂には「阿多古」の御札も祀られて民俗信仰色豊かである。彩色（化粧）された地蔵像は湖岸の2箇所のみであり、彩色（化粧）地蔵の盛行地とはいえないと考える。

湖南の滋賀県大津市坂本は、天台宗総本山延暦寺の門前町であり、里坊と呼ばれる寺が多く、路傍の地蔵をみつけるのは困難である。JR 比叡山坂本駅から比叡山ケーブル駅に向かう途中で、化粧地蔵を安置している地蔵堂を1箇所確認出来た。



写真13 大津市（坂本・杉浦・膳所）の彩色（化粧）地蔵

この地蔵は、いかにも石工が彫ったものと感じさせる像容のはっきりした石像である。全体に薄白（胡粉）と口紅を施した上品な彩色である。

大津市御幸町、膳所や杉浦町には彩色（化粧）地蔵が確認された。膳所や杉浦町は、民家が建ち並ぶ路地奥の祠に安置されていて、杉浦町には特に個人所有の地蔵が多い。彩色の多くは、顔のみであり白塗りで口に赤、という京都市内と同様のものである。

同じく湖南の草津市は、「地蔵盆」が今なお盛行している地域であり、各町内会には地蔵が安置されて日々の管理が行き届いている。



写真14 草津市の彩色（化粧）地蔵

草津大路1丁目から草津3丁目を中心に10箇所以上に数十体の彩色（化粧）地蔵が存在する。草津市観光ボランティアガイド協会では「散策マップ」に地蔵の御堂（祠）を案内している事からも、大津・草津では地蔵彩色の習俗が盛行していることが容易にうかがえる。



写真 15 草津市の観光地図と地蔵マップ

特徴は、色鮮やかで数種の色で彩色されていることである。ただ、彩色が石仏全体に及ぶことはない。色調は若狭に近いが彩色する部位は京都とほぼ同様である。

湖東の近江八幡市と彦根市には、やはり各町内会管理の地蔵が数多く安置されている。しかし近江八幡の2体を除いては、はっきりと彩色を施した地蔵は確認できない。近江八幡の彩色された地蔵も他に類をみないような彩色方法であり、ご近所の方のお話では「ごく最近（10数年前）塗り始めた」とのことであった。やはり彩色習俗の盛行地ではないと判断するのが妥当であろう。



写真 16 滋賀県の稀有な事例（左から近江八幡市、長浜市、高島市朽木）の彩色（化粧）地蔵

湖北の長浜と高月・木之本では、湖東同様に地蔵は各地区において安置・管理されている。地蔵の彩色は長浜元浜町で1体のみ確認された。彩色の状態も派手なものではなく、顔に胡粉を施した程度である。地蔵像は多数安置されているが、彩色（化粧）を確認出来たのは1体のみであり、長浜の地蔵は稀有な事例と言わざるを得ない。琵琶湖の最北に近い高月・木之本では、地蔵像に彩色（化粧）をする習俗はまったく確認出来ない。蛇足であるが、木之本では木之本地蔵院の「木之本地蔵」が「眼の病・延命息災」の仏として有名で、大勢の信者から篤い信仰を寄せている。

最後に、高島市朽木（旧：滋賀県高島郡朽木村）地域を個別に扱ったのは、古くは都との文化の交流が深いとされていた、若狭街道（通称：鯖街道）中間の山間集落であるためである。

朽木の中心部は市場地区である。その市場地区では3箇所で地蔵像を確認するとともに、地区の総代（話者：山崎氏、石田氏）からの聞き取り調査から、「朽木の市場では、最近は地蔵盆はやらなくなったよ」、「世話役もいないし、子どもも少ないからね」という状況がわかった。さらに、「色を塗

表7 滋賀・琵琶湖岸各地方の化粧地蔵調査表

	朽木 註(5)	今津	大津 坂本、 膳所、杉浦	草津	近江八幡	彦根	長浜	高月 木之本
彩色の起源	習俗 なし	不明	不明	不明	不明	習俗 なし	不明	習俗 なし
彩色の由来		不明	不明	不明	不明		不明	
彩色の意味		不明	不明	不明	不明		不明	
彩色する主体		町内会	不明	子ども	個人		商店街	
彩色の時期		地蔵盆前	不明	地蔵盆前	地蔵盆前		不明	
彩色の材料		ペイント	白粉、胡粉	白粉、胡粉	ペイント		白粉、胡粉	
彩色の色彩		白、赤、黒	白、赤、黒 緑	白、赤、黒、黄、 青	白、黒、赤		白、黒	
彩色の費用		町内会	不明	町内会	個人		商店街	
信仰との関連		不明	不明	不明	不明		不明	
彩色の部位と 地蔵の像容		顔のみに塗る。 像容は不明確	顔のみに塗る。 像容は明確	像全体に塗る。 像容に一貫性なし	塗る部位に一貫性 なし。像容明確		顔に薄く塗る。 像容は明確	
その他 特記事項		2箇所のみ	多数確認	多数確認	2体のみ		1体のみ	

ったお地蔵さんは……？」と質問すると、「京都や小浜は地蔵さんに色を塗るらしいが、朽木には今も昔もそんな伝えはないよ……」、「あっ、隣の岩瀬には立派な地蔵堂と珍しい地蔵があるから行ってみれば」と教えていただいた。⁽⁷⁾

朽木の調査から、この地域は民俗信仰としての地蔵を祀る習俗は希薄であり、彩色地蔵は確認出来なかった。

(5) 大阪府下（高槻市、茨木市）

大阪府下の高槻市、茨木市は旧摂津の国の東に位置するかつての宿場町で、京都との隣接地として西国街道と淀川を流通経路に都の文化や経済の交流が盛んであったといわれている。

高槻市には、『高槻の化粧地蔵——地蔵盆とその習俗——』に詳細な記述がある。

「……（前略）……109の祠に307体の地蔵を確認した。特徴的なことは、地蔵のうち258体までが化粧地蔵であることだ。」（岩井 2008：3）と、地蔵像の安置状況と彩色の実態を紹介している。

高槻市での彩色について、「盆化粧を施すのは全域にみられる。しかし、この伝承される習俗が比較的よく受け継がれているのが、芥川地区である。」（岩井 2008：48）と、市内の分布に言及してい



写真17 大阪府高槻市の彩色（化粧）地蔵

る。

茨木市では、茨木市観光協会「いばらきの おと」というタウン誌特集「化粧地蔵さまの謎を探る?!」に、地蔵盆の準備作業の一つとして地蔵の化粧についての記事と、周辺の分布状況を掲載している。その内容は下記の如くである。



写真 18 大阪府茨木市の彩色（化粧）地蔵

「……（前略）……地蔵盆の前日もしくは当日になるとこれまでの化粧を落とし洗い清め『おしろい』を塗り、お顔を描いていく」、「……（中略）……元茨木川より西ではほとんど化粧地蔵の風習をみることができない」（茨木市観光協会 2013：vol.10）と、彩色（化粧）と分布に関して言及している。

高槻市、茨木市の彩色で特徴的なことは、両市ともすべての地蔵像ではないが顔のみに白と黒色で施していてそれがシンプルな色彩である点であり、この習俗は現在も盛行している。

表 8 大阪府下各地方の化粧地蔵調査表

	高槻市	茨木市
彩色の起源	不明	不明
彩色の由来	不明	不明
彩色の意味	綺麗にする（誕掛けも1回／年交換）	顔を明確にする
彩色する主体	子どもや役員	役員や個人の持ち主
彩色の時期	地蔵盆の前	地蔵盆の前
彩色の材料	白粉、絵具	白粉、絵具
彩色の色彩	白、赤、黒	白、赤、黒
彩色の費用	不明	不明、個人
信仰との関連	不明	不明
彩色の部位と地蔵の像容	顔のみに塗る。像容に一貫性なし	顔のみに塗る。像容に一貫性なし
その他特記事項	起源？ 『地蔵会勘定帳』（天保4年）	

IV 地蔵像彩色のまとめ

この章が彩色習俗のまとめ（結論）である。各地の調査で得た資料を基にして、彩色（化粧）習俗の分布状況の実態をまとめて、その分布からどのようなことが考えられるかを結論として以下にまとめてみたい。

(1) 近畿地方にみる地蔵像の彩色分布

① 地蔵像の彩色（化粧）分布図の作成

近畿（中央部～北部）地方において調査で得た資料から、彩色（化粧）地蔵像の分布状況について簡略な分布図を作成した（作図はフリーソフト「日本・世界の白地図」を利用して筆者が作図した）。さらに、作図は調査地域以外を削除した異形な分布図であることを追記する。

近畿地方の彩色（化粧）地蔵分布図



② 分布にみる彩色盛行地の考察

前項①では、調査地において（地蔵像の実態確認や地域での聞き取り）得られた資料を基に、筆者による簡略な彩色（化粧）地蔵の分布図を作成した。分布図にあらわれる彩色習俗の盛行地を概観するに、由来地とされる京都を中心にして北西に広い範囲で分布を示していることがわかる。

さらに、狭い範囲の盛行地としては、東は滋賀県の一部（大津市、草津市）、西は大阪府の一部（高槻市、茨木市）、南は京都府宇治市である。また分布図から考えられることとして、彩色盛行地は点在する地域を線で繋ぐことが出来る分布であるといえる。

地蔵像の彩色習俗を民俗地図（分布図）にしたものは他に例がない。狭い地域での短期間の調査ではあるが、本稿では初めての試みとなる簡略な分布図の作成が出来たといえよう。さらに細部にわたる調査を重ね、より完成された民俗地図としたい。

③ 地蔵像の彩色（化粧）分布にみる伝承並びに特徴の考察

ここでは、彩色習俗分布の実態から伝承の傾向と、各地の彩色特徴について考えてみたい。以下の図は京都を由来地とした彩色盛行地を線で結んだ経路図である（作図は筆者）。

彩色（化粧）地蔵伝承経路図



*京都を中心に、彩色習俗の盛行地（濃密）を線でつないでみた。調査において1～2体の確認例は「稀有な事例」として研究対象外とした。さらに、図示線を明確にするため、地名はあえて省略した。

④ 分布にみる伝承の考察 1（彩色の経路）

彩色習俗は、信仰の習合と考えられる記述（『本朝世紀』）から京都市（洛中）に由来しているということが広く知られている。滋賀での調査地は野洲、近江八幡、彦根、長浜、高月、木之本と湖南～湖北であり、各要所での実態調査からは、近江八幡（2体）と長浜（1体）という稀有な事例が確認出来たので、その結果から（滋賀県）草津迄を京都以東の盛行地とした。

西では高槻・茨木迄が調査地であり、以西の彩色については『高槻の化粧地蔵——地蔵盆とその習俗——』『地蔵盆と化粧の伝播』（岩井 2008）と、茨木では観光協会発行の『いばらきのおと』『化粧地蔵さまの謎を探る?!』から情報を得た。引用した以西の彩色内容については次の通りである。

「高槻における地蔵盆と地蔵への化粧は、わずかに天保四年（一八三四）の『地蔵会勘定帳』に残っている。これは「愛宕地蔵」の紺屋町の記録である。……（中略）……化粧については施していた当時の写真（高槻民俗資料館所蔵）から窺えるのである」（岩井 2008：46）。

伝播の経路については「京都町方文書（上京区：長尾町・須浜町）の記録」を引いて、「枚方・高槻・茨木」に多く安置されていると述べている（岩井 2008：47-48）。

近接（隣）地の茨木については、

……（前略）……元茨木川緑地の東側から阪急京都線に挟まれた一帯……（中略）……地蔵盆の前日もしくは当日になるとこれまでの化粧を落とし洗い清め「おしろい」を塗り、お顔を描いていく。……（中略）……化粧地蔵のルーツは古く京都から北前船の航路に沿って、各地域に伝わった。また、街道沿いに沿って茨木にもたらされたと考えられる。しかし、何故か、元茨木川より西ではほとんど化粧地蔵の風習をみることができない（茨木市観光協会 2013：「いばらきのお

と (vol.10 2013 秋号)』。

と、分布状況が述べられている。文献資料の検索や問い合わせ(教育委員会)、地域での聞き取り調査からも、地蔵の彩色が盛行しているのは茨木迄で、以西では濃密な彩色地蔵はみかけないということである。

以南は、奈良県や市教育委員会への問い合わせ、奈良町等々での実態調査からは、彩色(化粧)地蔵を確認出来なかった。奈良以外和歌山や三重では未調査である。今後の課題として残し、この論考では取りあえず彩色地蔵が数多く確認出来た宇治までを盛行地としておく。

最後に一番広域な分布を示している北部では、京都～亀岡～京丹波～但馬～丹後～若狭小浜まで、彩色(化粧)地蔵の濃密な分布を確認することが出来る。この経路は、古くから文化や経済交流(往来)が盛んとされている街道である。従って、彩色習俗は山陰(丹波)街道を通じて、但馬の一部、丹後半島一帯と若狭湾の宮津、舞鶴、小浜に伝承したと考えられる。尚、本稿Ⅲ-(4)の調査から、若狭(鯖)街道では、中間地区の朽木、熊川、上中には彩色習俗が確認出来なかったことからして、都との文化交流が色濃い若狭街道ではあるが、彩色習俗が伝承したとは考えられない。もう一つの若狭への経路である周山街道は未調査で、今後の課題とする。

⑤ 分布にみる伝承の考察 2 (彩色の行為と色調・色彩の特徴)

各地の彩色(化粧)調査資料から特徴を考察すると、由来地とする京都の彩色(化粧)地蔵とは、まったくその形態(彩色の色調・色彩と塗る部位)を異にする彩色(化粧)地蔵が各地にみられる。また、各地において、彩色(化粧)の一貫性や類似点を確認できる地域は数少ないといえる。

一様にはいえないが、彩色習俗を文化の継承と捉えたとき、各地の彩色の特徴と伝承、踏襲、派生の意味から、次のように考えられる。

- ① 伝承とは⇒伝え受け継ぐこと
- ② 踏襲とは⇒前人のあとをそのまま受け継ぐこと(古い習慣等)
- ③ 派生とは⇒根源からわかれ生ずること、分派して発生すること

まとめると、京都を由来地として各地へ伝承した習俗というには、各地での彩色(化粧)の色調・色彩と部位には一貫性は見受けられず、むしろ各地域独自に展開された習俗であるといえる。

以上を、本稿Ⅲから考えて

- ・彩色(化粧)を施す(塗る)行為は「伝承・踏襲」された。
 - ・彩色(化粧)の形態(色調・色彩・部位)は、各地において「変容・派生」した。
- と整理するのが、自然ではないかといえる。

⑥ 分布にみる伝承の考察 3 (伝承分類(経済伝承)の相関)

古くから、文化や経済交流の流通経路には陸路と海路があり、各々の特色がある。陸路では、山陰(丹波)街道、丹後街道において、経済伝承と文化の伝承がともなったと考えられないだろうか。経済伝承とともに彩色文化が、伝承・派生したとすればどのような事が考えられるのか以下にまとめる。

山陰(丹波)街道や丹後街道から、都(京都)に通じる経路で数多い経済交流の主要なものとして

「縮緬織物」がある。和装（着物）文化が盛んであった頃、縮緬織物の流通経路と彩色習俗が盛行する伝承経路は同一のものである。以上のことから経済伝承との相関について、次のようなことが考えられる。

田中宣子「京都小幅友禅業の衰退傾向分析と将来展望」には

……（前略）……江戸時代の享保5年（1720年）に中郡峰山町（現京丹後市）の絹屋佐平治が、同7年には与謝郡加悦町の木綿屋六右衛門、手米屋小右衛門、野田川町の山本屋佐兵衛が西陣から「ちりめん」の技法を持ち帰ったことに始まる（田中 2011：35）。

とあり、京都西陣と加悦・峰山の経済交流について言及している。

さらに、広瀬和雄（編）『前方後円墳とちりめん街道 地域史から日本史へ』では

機数の増加から、明和八年（1771）ちりめん産業の興隆は丹後加悦谷（加悦・野田川）が圧倒的な数であり、嘉永三年（1850）がピークで、1900年代には飽和状態の村から、網野（竹野郡）の増加が著しい……（前略）……機屋組織「上四ヶ所」に明石、温江、与謝、金屋……（後略）……（広瀬 2005：156、158）。

以上の地区（加悦、峰山、野田川、網野、明石、温江、与謝）は、縮緬産業で京都西陣との交流が頻繁であった事がうかがえる。

次に、足立政男「近世丹後縮緬機業における飛脚制度について」では、縮緬産業の流通を支えたと言われるのは、「ちりめん飛脚」と呼ばれた輸送人足であった、とある。「丹後から重量60キロ相当のちりめんを大江山を越えて、往路5日復路4日で京都西陣まで運んでいた」（足立 1962）。

以上のように、丹後における縮緬産業の興隆から、ちりめん飛脚によりその流通経路を通じて、京都西陣との行き来が頻繁になったと言及している。

確固たる論拠はないが、以上の論考を傍証資料とし本稿の調査内容を重ねて考察すれば、地蔵像の彩色文化の脈絡（地域順は不明）は山陰（丹波）街道から福知山で分岐して但馬の一部と、丹後街道から丹後半島の日本海側と若狭街道への宮津、舞鶴、小浜に伝承し派生した蓋然性が高いといえるのではないかと考える。

おわりに

地蔵（民間）信仰の諸相で、京都を中心に今もなお地域住民によって盛行している地蔵盆行事の準備の中で、石仏の地蔵像に彩色を施し化粧地蔵と呼称する、謎めいた習俗に着目し本稿を手がけた。

地蔵彩色に関しての先行研究は僅少で、尚且つ期待出来る有力な資料は少ない。そのような難解な習俗ではあるが、近畿地方（中央部～北部）では、現在も各地域において多数の彩色（化粧）地蔵が確認出来る。各地において、彩色地蔵像の実態と住民からの聞き取り資料を基にして、彩色（化粧）地蔵の分布とその伝承や色調・色彩の特徴について考察した。以下に、考察の成果並びに今後の課題について要点のみ箇条書きにしてみる。

【成果】

- ① 調査資料から、近畿地方にみる彩色（化粧）地蔵の実態分布が明確になり、分布図の作成が出来た。

- ② 京都を中心（起源）とした東西南北の分布から、現在にみる彩色習俗の盛行地が明確化された。
- ③ 各地において、地蔵に施す色調・色彩や部位に一貫性はないことが判明し、その特徴から彩色習俗は、伝承（踏襲）と変容・派生とに類別出来る。
- ④ 分布図からみる伝承については、経済伝承の傍証資料と重ね合わせると、伝承経路として山陰（丹波）街道、丹後街道の蓋然性が高いことを明らかに出来た。

【今後の課題】

- ① 彩色の由来や意味と信仰関連の明確化
- ② 彩色習俗濃密地域とその近接地においてで、何故地蔵彩色に有無があるのか（例：信仰等、何らかの影響か）
- ③ 彩色習俗の西・南盛行地について拡大調査の必要性
- ④ 東西南の伝承経路について文化、経済交流に関する補充調査の必要性

以上、調査資料を整理考察し、地蔵像の彩色習俗における現地調査の成果と今後の課題について簡略に述べた。

彩色習俗研究の初歩として、分布状況と特徴を知ることが目的として近畿（中央部～北部）地方を調査したが、各地での聞き取り調査において、起源や由来並びに彩色の意味については、説得力のある有力な資料を見出すことが出来なかった。

最後に、この難解で謎の多い習俗の全貌は、根気よくさらなる補充調査と熟考を重ねることで、民俗地図（地蔵像彩色習俗）の集大成を目指したいと思う。また、調査地においては近い将来、過疎化が進み、彩色習俗の衰退・消滅の一途が懸念されるため、今後の研究結果を早期にまとめて、後世に伝える説得力のある資料として発信したいと考える。

註

- （１） 地蔵の頭に乘せているのは「座布団」ではなく、「綿帽子」である。『伏見民政誌』に、「……（前略）……男女兒三歳ニ至レバ髮置キト称ヘ綿帽子ヲ冠セ……（後略）……」とある（京都府紀伊郡伏見町役場 1926『伏見民政誌』151）。

【髮置き】幼児が髪を伸ばし始めるときの儀式。白髪をかぶせ頂に白粉（おしろい）をつけ、櫛（くし）で左右に梳（す）く。中世末期からの風習で、普通は三歳の 11 月 15 日に行う（大辞林第三版）。

- （２） 孟蘭盆会とは、略して盆、お盆として我が国で今日もなお広く行われている祖霊などの供養会を指す。新暦となってほとんど七月または八月の四日間の祭りに変わった。……（中略）……孟蘭盆は中国撰述の『孟蘭盆経』による斉会で、そこに説かれる目連救母説話や地獄遍歴説話も広く流布され、こうした唱導から浄土願生思想も展開したが、孟蘭盆会の習俗は永く祖霊供養と農耕祭祀を中心とするものだった（『仏教民俗辞典』）。

- （３） 後光とは、光背ともいう。仏、菩薩の光明をあらわした彫刻や絵画の仏、菩薩像の背後に作られた光相。二大別して円光と挙身光とある。円光は頭光といって頭の後ろに作られている。挙身光は身光といって、全身から放つ光相を表している（『仏教民俗辞典』）。

- （４） 一般に六地蔵とは「村の入口、墓、寺の入口に立つ六体の地蔵をいう」。境界を守るため「京都六地蔵」は都に通じる各主要街道の入口に地蔵堂を建立し地蔵像を安置した。奈良街道一伏見六地蔵、西国街道一鳥羽地蔵、丹波街道一桂地蔵、周山街道一常盤地蔵、若狹街道一鞍馬口地蔵、東海道一山科地蔵である（『民間信仰辞典』）。

- (5) 通称「ちりめん街道」（重要伝統的建造物群保存地区 平成 17 年指定）とは、丹後～丹波を通り京都西陣との織物を中心にした流通が盛んであった経路の呼称である。尚、織物が運ばれると同時に、当然として生活物資や都の文化の流通も考えられるのが自然である（与謝野町観光協会）。
- (6) 「截金」（きりかね）とは、金箔や銀箔を截断し細長い線状や三角、四角の小片とし、これを彫刻や絵画などに貼付して輪郭線や衣褶線、文様をあらわす装飾技法。絵画では平安時代の藤原仏画の装飾に欠かせない技法として重用された。鳳凰堂扉絵では、仏菩薩の着衣の輪郭線や衣褶線はすべて截金であらわされ、1086 年（応徳 3）の「応徳涅槃図」では釈迦の着衣に、七宝つなぎ（七宝文）、立涌（たてわく）文、卍つなぎ（卍文）、菊花丸文などの截金文様が施され、画面に華麗さを添えている（世界大百科事典第 2 版）。
- (7) 岩瀬地区は、朽木の中心部市場地区から徒歩で約 30～40 分のところに位置する、世帯数 52、人口 151 人という集落である。路傍に地蔵はなく、立派な地蔵堂には延命地蔵・毘沙門天・不動明王の三尊形式で祀られている。通常地蔵菩薩を中尊に脇侍を従える形式は珍しく、本来の左脇掌善童子、右脇掌悪童子といわれている寺院形式ではない、民間信仰としての地蔵三尊であろう。この地蔵座像は、辻角に安置されている地蔵よりは、はるかに大きく内陣の門扉を開くことが出来なかったため、目測では高さ 1.5 m はある像であった。隣家の郷土史に詳しい山本氏にお話を伺うと「以前、台座や像に銘文の有無を調査したが、出てきたのは胎内仏だけであり、起源等の詳しい事は不明」であり、さらに延命地蔵には彩色があり、現在修復は高額なので剝離した彩色の修復は出来ないという事であった。（話者：山本氏）

引用参考文献

- 愛荘町民俗調査報告書 第一輯 2007 『ムラと組と家の地蔵盆』 愛荘町教育委員会
- 足立政男 1962 「近世丹後縮緬機業における飛脚制度について」『立命館経済学第十巻・第五・六号』 立命館大学経済学会
- 石川純一郎 1995 『地蔵の世界』 時事通信社
- 石上七輔 1999 「邪霊を防ぐ入れ墨とお歯黒」『化粧の民俗』（株）おうふう
- 一矢典子 2012 「若狭小浜の化粧地蔵——小浜市西津地区と小浜地区を中心に」『日本の石仏 No. 143』 青娥書房
- 井上頼寿 1933 『京都民俗志』 西濃印刷岐阜支店
- 岩井勝二 2008 『高槻の化粧地蔵——地蔵盆とその習俗——』 自費出版
- 茨木市観光協会 2013 「いばらきの おと vol. 10 2013 秋号」街のアレコレノート 社法：茨木市観光協会
- 大森恵子 2000 「但馬の行事と民間信仰——子供をめぐる民俗——」『フィールドから学ぶ民俗学』 昭和堂
- 加藤周一編 2006 『世界大百科事典』第 2 版 平凡社
- 亀岡市史編さん委員会 1998 『新修亀岡市史』資料編第 5 巻亀岡の民俗誌 京都府亀岡市
- 京都府紀伊郡伏見町役場 1926 『伏見民政誌』 京都府紀伊郡伏見町
- 黒板勝美（編）1999 『本朝世紀』新訂増補 吉川弘文館
- 桜井徳太郎（編）1980 『民間信仰辞典』 東京堂出版
- 杉山秀雄 1969 「仏教彫刻の彩色の下地について」『美術院紀要』 美術院
- 田中宣子 2011 「京都小幅友禅業の衰退傾向分析と将来展望」『ビジネスレビュー第 13 号』 龍谷大学学術機関リポジトリ
- 近石哲 2013 「地蔵盆行事にみる地域の特徴と相関——京都市北区と小浜市・舞鶴市の地蔵盆を事例として——」『年報非文字資料研究第 9 号』 神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター
- 豊岡市教育委員会 1981 『豊岡市の石造遺物 総集編』 豊岡市教育委員会
- 西川杏太郎 1972 「彫像の彩色法について」『仏教芸術 86 号』 毎日新聞社
- 林英一 1997 『地蔵盆——受容と展開の様式』 初芝文庫
- 伏見のまちづくりをかんがえる研究会子どもの生活空間研究グループ 1987 『子育ての町・伏見——酒蔵と

地蔵盆』 都市文化社

仏教民俗学会（編） 1986 『仏教民俗辞典』（株）新人物往来社

牧田茂 1973 「京の夏と地蔵盆」『化粧地蔵 こどもの神さま』 淡交社

松浦忠平 1983 『地蔵盆——京の夏 おもいでばなし——』 クロウ・アンド・スパイス

広瀬和雄（編） 2005 『前方後円墳とちりめん街道 地域史から日本史へ』 昭和堂

村澤博人 2001 「化粧という文化」『サティア第 44 号』 東洋大学井上円了記念学術センター

柳田國男 1969 『日本の伝説』 角川書店

山内登貴夫 1967 「仏教と仮面」『仮面の民俗』 鹿島研究所出版会

山路興造 2009 『京都芸能と民俗の文化史』 思文閣出版

渡邊三四一 2012 「石神仏に色を塗ること——その民俗的解釈に向けて——」『日本の石仏 No. 143』 青娥書房

参考資料

草津市観光ボランティアガイド協会 2010 「手づくり草津宿本陣周辺散策マップ」 まちなか交流施設くさつ夢本陣

御食国若狭おばま食文化館 2010 「西津の化粧地蔵と地蔵盆会場マップ」

宮津市郷土研究会 「宮津のお地蔵さまめぐりあいマップ」 宮津美しさ探検隊

参照ホームページ（URL）

京都市北区役所ホームページ <http://www.city.kyoto.lg.jp/kita/2012/8/20>

小浜市役所ホームページ <http://www1.city.obama.fukui.jp/2011/822>

舞鶴市役所ホームページ <http://www.city.maizuru.kyoto.jp/2011/8/20>

宮津市役所ホームページ <http://www.city.miyazu.kyoto.jp/2012/8/21>